

「立命館大学」

グッドデザイン賞の受賞に繋がったPBL型建築設計教育についての一考

宗本 晋作 ● 立命館大学理工学部准教授

1 学生による設計

手元に1冊のエコール・デ・ボザールの作品集がある。ボザールにおいても現代と同じように設計競技が行われ、最優秀作品にはローマ大賞の荣誉とローマへの留学の権利が与えられた。これらの美しい建築の表現を眺めていると、時代背景や構想の根底にあるものは、現代とは大きな隔たりがあるのは当然だとしても、そこに込められた製作者の思索と痕跡が見る者に伝わってくる。

学生による設計には、表現の手法が異なっても、建築が実現していく過程で少しずつ失われてしまう純粹な部分が凝縮されている。学生が夢見る、現実の建築になる前の原型のようなものが丹念に描きこまれ、実現される

ことへの切望の顕現となって大きな感銘を与える。これは時代を超えて変わることはない。

2 建築の設計実務に倣い学ぶ

建築の設計実務においても、無論、建築の原型を求め。明快なコンセプトの打ち出しを図り、学生時と同様に「世界の核心」を探ろうとする。しかし、多くの場合、クライアントの要望や建築法規、コスト、幾多の現実の制約が障壁となる。結果としての作品が、率直な表現として立ち現われてくるとは限らない。

また建築の設計活動は、課題発見と表現活動が同時に進行する。行ったり来たりと逡巡し、時には迂回する。最終的に他者による評価や他律的な判断が下される。これらの体験により、あるときは後悔、あるときは全能感に満たされる。

設計体験の共有という主眼からみれば、今回は、学生とのグッドデザイン賞の共同受賞に繋がったものの、結果としての成功も失敗も共に尊く、等価な体験である。

実は、最初からPBL (Project-Based Learning: 課題解決型学習) を意識していたわけではない。実施した内



学生による設計競技最優秀案（実現作品の原案）

容が、PBLと呼ばれる

ところの、学生が自主的かつ協働して活動する中で実用的な能力を高める学修形態の一つに当てはまることは後から知った。

建築の設計実務に倣い、

設計課題の設定から、設計競技による最優秀案の選定、実現に向けた検討課題の共有とチームによる設計作業、工事途中に

おける数々の意思決定の連続、完成した建築のプレゼンテーションと外部評価まで、実現に向けてすべての過程に個々の学生が一人のプロとして責任感を持って取り組んでもらうことを心がけた。

3 学生の成長と建築家としての人生に期待する

実作に至る設計経験を共有した学生の設計に期待するのは、現実の障壁に遭遇しても、求める建築空間を実現させようとする不屈の思索と、常に全力で目標に向かう

てエネルギーを費やす情熱にある。

学生一人ひとりの思索の深さは個人的な体験になると同時に、建築作品となった時にその時代の歴史、文化、社会がおかれた状況との相関として立ち現われてくる。プレゼンテーションのために費やされる若い膨大なエネルギーは、試行錯誤と引き換えに、新たな発見の道を切り拓くための貴重な契機を与えてくれるはずである。

それぞれの学生は、卒業して自らの道を進んでいく。私の建築家としての体験を振り返ってみても、自身の設計体験や作品を生涯忘れることはない。学生のときに見いだした建築の本質や意図したものが受賞という結果に繋がったことを最大の糧として、その後の大きなマイルストーンになることは間違いない。

将来、建築家を標榜する学生が現れることを夢見ながら、熱意ある学生との協働設計を楽しんだことが、このPBLの醍醐味であったと感じている。



実現作品

〔成蹊学園〕

伝統ある景観の継承と創造

高橋 章建

● 学校法人成蹊学園財務部長

成蹊学園は1924年に、池袋駅の西口一帯2万坪の敷地から吉祥寺の地に移転した。現在、小学校から中学・高等学校、大学、大学院に至るまで、8万2000坪の一つのキャンパス内に設置されており、運動施設も同施設内に併設されている。本学園のシンボルである樺の若木が、移転時に生徒・教職員の手で植えられ、並木奥にシンメトリの重厚な本館が配置された。この景観が大切に守られてきたことで、全卒業生に世代を超えた共通の記憶、母校の原風景が醸成され、今日に至っている。

学園キャンパスは時代を経て、成蹊教育の進展に伴う開発・再開発が行われており、施設の一つ一つに、その時代の先達の児童・生徒・学生への思いが込められ、ストーリーが存在している。その一方で、時代を経てもなお、伝統ある景観が思いを同じくする者の努力によって

継承されている。

本学園では、創立100周年（2012年）に向けて始動した「新・成蹊創造プラン」を機に、これまでの先達の努力と卒業生共通の思いを確認しようと、2011年に敢えてキャンパス全体のグッドデザイン賞申請という形でのチャレンジとなった。

ワンキャンパスでの一貫教育

吉祥寺移転時、敷地は一面の桑畑であったが、武蔵野という四季折々の風情が楽しめる環境の中に校舎や樹木が配され、現在の伝統ある景観形成に至っている。「自然」「伝統」「未来」が調和した環境の中で、在校生や教職員が、境界のないワンキャンパスに身を置き、日常、直接に相互が切磋琢磨できる、真の意味での一貫教育が実践可能な教育空間を共有・継続し、築いてきた。

人と地球に優しい環境と環境マインドの醸成

在校生が安全かつ円滑に学校生活を楽しみ、地域社会との連携を促進するため、各世代に配慮した人に優しいバリアフリー設備の導入を積極的に行ってきた。更に、



環境と共生する地球に優しい教育環境を目標に、ISO14001の認証を取得して学園全体で環境活動に取り組んでおり、環境マイノリティを持った人材を社会に送り出す活動も教育機関として継続的に行っている。

施設・設備面では、環境負荷低減のため、全ての建物で基本消費

電力を削減する高効率型照明器具に人感センサーや太陽光照射センサー機能を併用している。また、空調設備には空冷チラー、ガスや電気を動力とした空調機器を効率よく採用し、新たなエネルギー消費の発生を抑えている。

受賞での評価点および受賞後の反応

グッドデザイン賞受賞の評価は、武蔵野の自然と共生するキャンパス計画、さらに周辺の道路環境も取り込み、

校舎も含め地域と一帯となって良い環境を造り上げている本学園の継続した取り組みが評価された。

一つの建築物でなく、ワンキャンパス全体でのグッドデザイン賞の受賞は、各年代の在学生・教職員が過ごした当時の愛着あるキャンパスと、更には将来のキャンパスも思いを同じく継承されていく限り、グッドデザインとして評価され得るものと理解している。創立100周年を機に在校生、卒業生、教職員などの関係者が、世代を超えて学園キャンパスに対する共通の思いと喜びを共有し、受賞が共感を持って受け入れられた。

歴史が培った景観の継承と新たな取り組み

武蔵野市の指定文化財となっている櫟並木は約600メートルに及び、四季折々の景観が自然豊かな教育環境形成に寄与しており、東京都の「新東京百景」や環境省の「残したい日本の音風景百選」にも選定され、近隣や地域の方からも広く親しまれている。成蹊学園では、櫟をシンボルツリーとして、櫟並木の軸線を基本に、環境と調和した施設開発が実施されてきた。このような学園の歴史の中で培われた景観の継承は、学園にとって今後も大きなテーマである。

【芝浦工業大学】

大学のグローバル化と 国際学生寮

丁 龍鎮

● 芝浦工業大学国際部部长

設置の経緯

芝浦工業大学は、2013年4月に大学のグローバル化の拠点として大宮キャンパス内に「芝浦工業大学 国際学生寮 (SIT Global Dormitory)」を設置した。

本学のグローバル化は、1993年円借款によるマレーシア高等教育留学事業の幹事大学をはじめ、東南アジアの理工系大学とのコンソーシアムなどを軸に積極的に展開してきた。そのような取り組みが評価され、2012年度グローバル人材育成推進事業、2014年度には私立理工系大学で唯一スーパースクールグローバル大学創成支援に採択された。このことは、本学が今後理工系大学におけるグローバル大学を標榜し推進していくことを学内外に表明したことになる。

本寮は、理事長自らの発案で、学長をトップとする教学の責任者が一堂に会し、教学に関する諸問題を討論する教学経営審議会にて検討し、理事会で承認され、すぐさま寮建設に関する委員会などが発足した。さらに、建設計画の策定から竣工までの迅速な対応は、ガバナンス改革を率先して行った本学の意思決定の速さによるものと実感している。まさに「善は急げ」であった。

国際学生寮の概要

本寮は、日本人学生と留学生が文字通り寝食を共にする生活環境の中で異文化交流でき、海外に出かけなくても「留学疑似体験」ができる教育寮として構想した。設備などのハード面では、生活習慣や文化の違いを尊重し快適な個人空間を提供する寮室、年末の大掃除や餅つき大会など、学生が自ら企画し、実施する共有スペース「グローバルプラザ（多目的スペース）」などがある。さらに、食を切り口に異文化交流のできる「シェアキッチン」や、親睦を深めコミュニケーションを楽しむ「コモントラス」などがある。ソフト面としては、各フロアに学部生、大学院生のRA（レジデントアドバイザー）を配置



国際学生寮での生活の様子

堪能なイタリア人の管理人とのコミュニケーションも、学生の語学力向上に寄与している。

グッドデザイン賞の受賞

寮のエントランスから足を踏み入れると明るく清潔感のある雰囲気、寮室棟をコモンルームでつなぐH型のゾーニング、コモンルームへとつながるシェアキッチンが、留学生が自国料理を披露しながらコミュニケーションを図る重要な場となっている。本寮は、ハードとソフトの融合により機能的かつ快適な生活空間を提供し、グローバル人材に必要な要素である「異文化理解力」「コ

し、定期的に行われるフロアミーティングなどで文化の違いによる課題の解決やフロアのルールづくりの指南役を担っている。最近ではミーティングも英語で行い、議事録やフロアの掲示なども英語で作成している。また、本寮では日本語、英語、イタリア語、フランス語がコミュニケーションも、

ミニコミュニケーション」「問題解決能力」の醸成に貢献していることが、今回のグッドデザイン賞受賞で評価された点であると分析している。また寮が大学のキャンパス内にあることで、研究室での研究活動が深夜に及んだ場合も安心して帰宅できることや、本賞を受賞した快適な空間に居住できることが保護者の満足感、安心感に繋がっている。また、留学生にとっては、初めて母国を離れ一人暮らしをするのが学生寮であり、学生寮は留学の善し悪しを決定づける最も大事な要素（施設）と言っても過言ではない。その観点からも、本受賞は海外からの留学生の客観的な留学先決定の指標になっていると感じている。

今後の展開

今後は、第2国際学生寮の設置なども視野にいれながら、当面は現在ある本寮のグローバルプラザをはじめ、他の施設などをフルに活用し、国際色豊かなイベントを寮生以外の学生も巻き込み、真のグローバル化の拠点として位置づけていきたい。国際学生寮を通して学生の満足度を上げ、その向上に真剣に取り組む教職員の笑顔は、大学全体の幸福度アップにつながっていると確信している。